

---

# 漆黒の騎士と白衣の天使

reki

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漆黒の騎士と白衣の天使

### 【Zコード】

Z7208Y

### 【作者名】

rek\_i

### 【あらすじ】

自分の生涯を思つがままに生き、世界の在り方を変えた漆黒の騎士。

そんな彼の傍らには常に一人の白衣の天使がいた…？

白衣の天使マジ天使！

そんな、かなりお馬鹿でちょっとびりシリアルな剣と魔法と戦争な物語。

## 登場人物紹介（前書き）

黒獅子旅団の人物設定です。  
読まなくても問題ありません。  
むしろネタバレを含んでいるので、先に本文を読んでから読む事を  
オススメします。

## 登場人物紹介

黒獅子旅団とは。

イリシエン王国北部に本拠地を置く、賊やならず者の集まりである。人数があまりにも多くなると、北部の山の麓に黒獅子の街が造られた。

街は意外と治安がよく、団長のカリスマ性からか、人が多く集まり、黒獅子旅団は一つの国であるとすら言われた。

軍部序列

団長

副団長

総司令官

各隊総長

各隊隊長

各隊副隊長

各隊班長

各隊副班長

各隊兵卒

\* 主要メンバー \*

団長

ルイ・ショーン＝ヨジエワール

イリシエン王国ヨジエワール領の、首都ヴァレス出身。

イリシエンの貴族で最も位の高い公爵家に生まれたが、生まれた時

から魔法が使えたため、呪われし忌み子と教会に宣言される。

金髪碧眼の美形で少年時代は女の子に間違われる事が多かった。

母の病死後、黒獅子旅団（元は盗賊や不良の集まりだった）を結成し、国を変えようと駆け回ることになる。

武、魔、軍、政、知、商、詩などあらゆる分野に高い才能を垣間見せる天才。

副団長兼魔導隊総長

サクラ＝サカモト

日本人、坂本桜。

背は日本人の平均程度、少し痩せぎみ。

成績は文系が得意。理数は苦手で得意料理はハンバーグ。

温厚な父と過激な母に愛情を注がれ、健やかに育つ。

父の経営する精神病院で患者さんを励ましている。何故かナース服を着用しており、白衣の天使と自称していた。

転生後、不浄の森に捨てられ、森で育つ。

圧倒的な魔力と可憐な容姿を持つて産まれるが、その言動は異常。凄まじい殺氣を放ち、首を狩ることが日常的な行為になつているため、ルイシェンには森の死神と評される。

軍総司令官

カイゼル＝サードレンシア

南西の没落貴族の出自で、元帝国騎士。

卓越した武術の使い手で、剣、槍、弓とそつなくこなす勇士。

黒獅子旅団に入った後、一躍有名になると、帝国は武神を捨てたとの噂が流れた。

その腕前は旅団内では勝てる者がいないほどであつたため、武術師範代に抜擢され、団長ルイションも彼に武芸を教わっていた。旅団が大きくなるにつれて彼の地位も上がりつゝ、最終的には軍総司令官となつた。

歩兵隊総長

ライズ＝アッサム

ルイションの幼なじみ。

平民の生まれだが、ちょっとしたことからルイションと知り合い、そこから生涯の付き合いとなる。

団員から弄られることが多いが、実力は確か。剣を使わしても槍を使わしても器用にこなす。残念ながら魔力は皆無であるが、ルイションに叩き込まれた軍略をものにしているので、兵を率いての戦いも見事なものである。

\* \* \* \* \*

役職一覧

団長

ルイション＝ヨジエワール

副団長

サクラ＝サカモト

総司令官

カイゼル＝サードレンシア

歩兵隊総長

ライズ＝アッサム

騎兵隊総長

ライオネル＝ジェラール

弩弓隊総長

ウイグシル＝ハートーツン

魔導隊総長

サクラ＝サカモト

竜騎隊総長

チイ＝クーフーロン

諜報隊総長

リリースレンダー＝ヴンアークス＝レムレム

総司令官補助

ジェイク＝ラルク

ジェガン＝ラルク

歩兵隊隊長12名 副隊長12名

歩兵隊班長30名 副班長30名

騎兵隊隊長8名 副隊長8名

騎兵隊班長20名 副班長20名

弩弓隊隊長5名 副隊長5名

弩弓隊班長17名 副班長17名

魔導隊隊長3名 副隊長3名

魔導隊班長11名 副班長11名

竜騎隊隊長3名 副隊長3名

竜騎隊班長8名 副班長8名

諜報隊隊長12名 副隊長12名

諜報隊班長48名 副班長48名

## 第0話『プロローグ』

旧暦1877年

イリシエン王国のとある貴族の家に一人の男が誕生した。

名を”ルイフェン＝ヨジエワール”

後世に名を残す”漆黒の騎士”その人である。

何故、千を優に越す罪を重ねた大罪人が王に忠誠を尽くす騎士と呼ばれたのか。

何故、彼は皇国を壊滅的な危機に陥れても尚、破格の英雄と呼ばれたのか。

何故、黒き悪魔と罵られ呪われた忌み子と蔑まれた彼に付き従う者が数万人もいたのか。

何故、何故、何故。

彼の死後數百年を経つた今も疑問は尽きないだらう。

私は彼の子孫として彼の研究に生涯を費やしてきた。  
それでも尚、疑問は尽きない。

その最もたる存在がルイシェンに付き従つてきた人々の筆頭たる女性にして、自らを”白衣の天使”と称する奇跡の変人、サクラ＝サカモトである。

彼女の出自は全くもつて不明であり、その能力、言動は他に類がないほど特殊なものであった。

一説には異世界人という説もあるが、それが一番彼女を言い表して

いる言葉とも思えてくる程である。

神秘的な黒髪黒眼で何を指して白衣の天使などと宣っていたのかは不明であり、治療と称して愛用していた細剣で病人の腹を切り裂いたという記述まである。

私は彼らの子孫として、彼らの謎を解き明かし、明確なる真実をいつの日か記す事を此処に誓う。

皇國曆526年 12月31日

アシク＝ヨジエワール

## 第0話『プロローグ』（後書き）

いつも、こんばんは！

最初っから致命的なミスを犯していました  
が、修正します！

序盤は展開早すぎて作者もついていけませんが、楽しんで頂ければ  
幸いです！

## 第1話

――――――

どこだルイション！

屋敷内には居ないようです！

くそつ、あの馬鹿！今度は我が家に伝わる宝剣を持って行きやがった！

――――――

「ふん、なあにが宝剣だよ。こんな無駄に装飾ばかりされたナマク」

「！」

そう呟いて彼は馴染みの商人の家に入る。

この少年、家から「ツソリ金田の物を盗んでは売りつけているのである。

「おやおや、今度は何を盗つてきたんだい？ルイション坊や」

商人の方もそんな事はお見通しのようで毎回からかつてはいるが、実際に彼が持つてくる物は利になるので、結局買い取つて一一所

謂共犯者である。

「坊やは止めてくれよ、それより今回は良いものを持ってきたんだ。  
期待してるぜ?」

そう言つて一振りの剣を手渡すルイ・シェン。

13歳の冬の日であった。

\* \* \* \* \*

結局のところ、剣は買い取つて貰えなかつた。

なんでも時の皇帝が我が國の国王に下賜し、更にそれをウチの御先祖様に下賜した物で世界に一振りしかない超貴重な物、らしい。その貴重さ故に、すぐに露見してしまう可能性が高いのだ。

「なあにが世界に一振りだ。俺の、そこの盗賊から奪つたこの剣  
だって世界に一振りだつて。第一、…」

そんな大事なモン、ウチなんかに譲るなよ王様。

仕方ないので腰に佩して都をぶらりと散策する。  
屋敷に帰れば罵倒が待つてゐるだけだ。

「最近は金目の物を盗む時しか帰っていない。

母が病氣で死んでから、ずっとこんな調子だった。

家を出て、悪友共と武装して馬を駆り、敵対している賊とやらを漬し吸収し、武具、馬等を奪い根城へ帰る。

根城に帰れば酒、賭博、女の毎口だ。

だが、それでも父の統治するこの都の人々からの支持はかなりのものだった。

なんせ、俺達の行いが都の治安を守っているようなものだから。俺は自分の家からは盗むが他人の物は盗まない。ただし、敵対していなければの話だが。

今の世は腐っている。

王族、貴族共は民から高い税を絞り尽くし帝国へ賄賂を送り官職を金で買い、更に権力を上げて金を絞る。

賊もって賊を潰す。そして乱もって乱を制す。  
それが俺だ。

いつの日か、今の腐敗仕切った王族、貴族を叩き潰してやる。

例え、それが唯一の肉親、父ーゼラード＝ヨジエワールを殺す事にならうとも。

「俺のやるべき事は、変わりはしない」

## 第2話

彼、ルイシェン＝ヨジエワールは何故ここまでひねくれてしまったのだろうか。

\* \* \* \* \*

「ルイ、俺ら、あの餓狼旅団に睨まれてるらしいぞ？」

悪友達の一人、ライズが切り出した。

俺が立ち上げた、この名も無き一賊結成以来の古参幹部の一人であり、弓の達人でもあり、若干14歳の割には頭もそこそこ良い。俺と年も近く兄弟同然に育つってきたので気心も知れている。因みに字が読めるのは幹部の最低条件である。

「餓狼旅団：なかやかデカい獲物が掛かつたじゃねえか。ライズ、幹部を呼んで軍議だ！それと、野郎共に久々に派手な戦を始めつから、酒と女を絶つように伝えておくんだ」

「了解した！」

餓狼旅団とは総勢4500人を越える山賊の一大勢力である。

グラントレー＝ヴエル帝国が統べるこの大陸は大まかに分けて五つの大

国で成り立つてゐる。

まず中央には実質的な大陸の支配者が居座る、グランレー・ヴェル帝國領がある。

北西の国、イリシエン。

北東の国、サイリウス。

南西の国、アンリッタ。

南東の国、ウルエチア。

我が國は北西の国イリシエンである。

国の北部は険しい山脈が広がつており、西部には雄大な海が見える。父ゼラードが統治する都は中央王都の北部で、俺達の根城はそこから更に北部、つまり山の麓にある。

ウチの一賊は1000人に届くか微妙な所に対し、敵は4500を越えるとも言われている大勢力…何かしら策を弄すしか勝ち目は無い。

「よつ、大将、戦の匂いがするなア」

「丁度いい時に帰ってきたな、カイゼル。これから対餓狼旅団戦の軍議だ。あんたも参加してくれ」

カイゼル、28歳。

その性質上、若い者が多い一賊の中では兄貴分の様な男だ。

三年前、つまり俺がまだ10歳の頃、立ち上げたばかりの一賊に最初に喧嘩をふつけてきたのがこの男が率いる賊だった。

たしか遊廓から出てきた所を落とし穴に嵌めて、10歳前後のガキが寄つてたかつて袋叩きにしてた記憶がある。

まあ、ぶつちやけ1000人中400人は彼が連れてきた野郎共だ。

「くくくく、餓狼旅団つたらよウ、お前、イリシヨンでも屈指の上  
賊じやねえかア」

「うん？か怖いなら帰つてもいいんだぞ？」

「おいおい、勘弁してくれよウ。あそここの頭には散々コケにされた  
んだア。頭は俺が斬るぜエ」

「ああ、いいだろア。その前に作戦会議、だがな」

カイゼルは馬鹿じやない。

酔つて落とし穴には嵌まるが、戦時の勘は鋭く、判断も速く正確で  
ある。

なにより、その剣、槍、弓、その他あらゆる武術の才能が桁外れだ。  
元々は騎士の出自らしいが、それが何故たかだか13歳の悪ガキに  
従つているのか、俺にはよく分かつていない。

一確かに俺は強いア。まあ、お前さん程じゃなかつた…それだけ  
の話ア。

魔法を使えば勝てるとは思つが、剣と剣で打ち合つても、まだ勝て  
ない。

彼は俺の、いや、一賊全体の武の師範とも言える存在なのだ。

数分後、複数の足音が幹部達の到着を告げた。



## 第2話（後書き）

11 / 22

幹部を収集して 幹部をよんでは  
性質状 性質上

まず国語の勉強かな、うん

\* \* \* \* \*

うにに、ヒロイン出てこない…  
てかここまで女の子0人…むさい

### 第3話

そして時は流れ、ルイ・フィリップ18歳の秋を迎える。

\* \* \* \* \*

王が死んだ。

今回の王は先王よりもさらに愚鈍な、まだ子供の王、ケーフン。

「鶏糞は傀儡だ」

「鶏糞じやなくケーフンなんだけど、似たようなもんか」

鶏糞だろうがケーフンだろうが関係ない。

問題は傀儡だつてことだ。

つまり先王の時代に金で得た宰相の位を持つ肩の娘と先王との間に生まれた子、それがケーフン。

宰相とその一族が政権の全てを握つた事になる。

この時、ルイ・フィリップの一派は半年で約5倍の餓狼旅団を率下に收め、その勢力は留まることを知らず巨大だった。

黒地に獅子を描いた旗を掲げた一派は”黒獅子旅団”と呼ばれていた。

本拠地は北の大山脈の麓にあり、すでに一つの街となつてゐる。

事態を重く見た国は軍を派遣してきたが、禄に訓練もしていない兵に勝ち目はなく、忠誠心の薄い兵は黒獅子旅団に吸収される始末だつた。

「おや、あの馬車は…ルイ、君の家の家紋だね。お父上かな？」

\* \* \* \* \*

「ルイ・シエン！早く、賊を解散して家に帰つてこいー先王の代ではよくして頂けていたが、このままでは我が家は潰されてしまうのだぞ！」

そんな事だらうと思つた。

今、ヨジエワール家は一族存亡の危機にまでなつてゐる。  
原因は無論、この俺にある。

「父よ。既にして我が家はヨジエワール家に在りらず、此処黒獅子旅団にある」

「ルイ・シエン…お前が大義を抱いていることは知つてゐる。だが、この賊でどう今の世を正そうと言うのだ！？  
王を誅殺し、お前が王になるとでも！？

そんなことでは民は誰一人として納得しない！？

あのような愚王でも、王家の威光は確かにあるのだ！？」

「俺なら、ゴアンを王に立たせる。あれは聰明で、民を重んじる」

ゴアン 16歳

父の妹と先王との間の子である。

ちなみに父の妹はすでにケーフンの母に毒殺されている。

「だが、ゴアン王子は…どこかに幽閉されていると聞くべや」

「大体の用処は付いている。発見、保護した後はゴアン殿下一こそ王位を継承すべきと主張し、軍を挙げ、中央王都に進軍すべきだ」

「その前に宰相一族に北部領を取られてしまつぞ…」

「断固抵抗しろ。ここが正念場だ、父上。

ここを耐えきれば我が国はガラリと変わる。

無能は城から消え去り、真に忠誠心があり、才ある者が官職を得る、自然な形の国に…。

そのためにも、この賊、いや軍は絶対不可欠であろう。

鶏糞なんぞは畑の肥料にするしか使い道はない」

確かに黒獅子旅団は強い。

国の正規軍などまるで相手にならない程である。

だから、ゼラードは賭けてみることにした。

親不孝で飛びつきりの不良の、しかし、たった一人の愛する息子に。

### 第3話（後書き）

「うつと、ねむいてんかいはやい

## 第4話

北部を我が領に”鶏糞一族”

幽閉された王子を探す会”黒獅子旅団”

\* \* \* \* \*

「まだ北部はどうにかならんのか？」

「宰相閣下、北部の領主は頑なに動じひとつしません。  
また、領民にも慕われており…っ！」

どべし！

鉄扇を振るわれた軍隊長が膝を折る。

「そんな事は聞いとらん！

王の勅命を無視する貴族なんぞに価値は皆無だ！領主の屋敷ごと焼き払え！」

「はつー！」

兵の宿舎に戻った軍隊長は、5万の兵を引き連れて北部に進撃。中央領と北部領の境にある村にて、ついに、ケーフン王を掲げる正規王国軍とコアン王子を掲げようとする正規王国軍から離叛した北部軍との戦端が開かれる事となるだらう。

\* \* \* \* \*

「いいか！相手はここ何十年も禄に仕事もしてねえ雑魚ッペ野郎共だ！」

俺達、北部の厳しさと共に生きてきた精強たる軍に適うハズがねえ！軽く捻り潰してやるつぜえ！――」

うおおおおおおお――――

楽勝だぜえええ！！

奴らの装備丸ごと剥いでやんよ――――

団長ー！抱かせてくれー――

よし、気迫は十分だ。

最後に可笑しな声が聞こえたが氣のせいだと信じたい。

正規軍は5万か。

対する北部軍は1万5千、黒獅子旅団を含めると2万3千といったところか…。

村は敢えて素通りさせ、その次の階で迎え打つのが最上だな。

皆なら防戦の俺達に圧倒的に有利に戦えるだろ？

しかし境界の村は…正規軍に略奪行為をされる事になるだろうが。

「カーブ、陣を率いて駆け出る……」

ジエイク、ジエガンはカイゼルの補佐だ！

ライズ、それとリリーとセルフィーは俺と引き続き王子捜索だ

二十九

野郎共！了ぐばん！

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ରିକାରେ - - - -

しかし暑苦しく奴らだ。

魔導隊の連中は付いていくのだろうか  
心配になつてくる。

黒獅子旅団は現時点では約8000人規模にまで膨れ上がっていた。そこまで、この国は落ちぶれてしまつていという事なのだろう。

旅団の内にも役割があり、各自に合った兵役をしている。

僅かばかりだが魔導の才を持つ150の魔導隊

そして魔導隊よりもごく少数だが空を飛ぶワイバーンを駆る50の

龍騎隊

それに隊長、副隊長を付け、指揮させている。

カイゼルは隊長、副隊長に指令を飛ばす軍隊長である。旅団の連中には將軍などと呼ばれているようだ。

「よし、行くぞ。俺達がコアン殿下を探し出すなけれど」の戦は終わらない

大義名分を得なければ、こちらから攻め入ることすら適わないのだ。

「しかし、あらかた匂うところは探し出してしまったじゃないか。実は皇后共々毒殺された後だつりして」

ライズが囁く。

まだ一力所、匂う場所が残っている。

不浄の森、幽閉された王子。

そんな噂話だが……。

「ライズ、コアン殿下が即位なされたら今の言葉を伝えておくわ」

そんな事を言つのは姉御肌なリリーだ。

長い赤髪に切れ長な赤い瞳を流してライズの耳元で囁く。

真っ赤な顔で反論しだしたライズを見て、からからと、紺色の眼を細めて、少女のように笑うのはセルフィ。

水色の長髪を背中のあたりで縛っている。

「お前ら、遊びに行くんじゃないんだぞ」

と俺が諫めてもセルフィが間の抜けた声で、はーい、と返事をするだけだった。

メンバーを間違つたか、俺。



## 第4話（後書き）

11 / 22

からから匂う あらかた匂う

あらから？（笑）

\* \* \* \* \*

あああ、白衣の天使が書きたい。

でももうちょい我慢。

でも設定はあるので紹介だけ

と、いうことで今更ながらキャラクター紹介をば

ルイ・ショーン＝モジュワール（18）

本作の主人公

イリシエンで最も位の高い公爵家の血筋を継ぐも賊の頭目になる。  
金髪碧眼で女の子っぽい童顔を本人は気にしている  
絵本に出てくる王子様の様な顔して悪党

サクラ＝サカモト（16）

日本人、坂本 桜

今時珍しい黒髪の和風美人

ルイ・ショーンの世界では黒髪は希少

実家の手伝いと称して看護婦さんの服を着て患者さんの心を癒やしているらしい

性格破綻者ではあるが魔法的にテンプレ通りの能力を持つ

## 第5話（前書き）

「いやあでプロローグでした。

えつー？

つまり女の子が出て来ないと物語は始まらないのです！

## 第5話

捕らわれの王子  
追われ者の黒獅子

\* \* \* \* \*

不浄の森

その名の通り不浄な障気が森一面に漂っている。  
この障気の中では教会の伝える聖なる精霊のお導き、所謂精霊魔法  
は使えない。

「まあ普通に自力で魔力練つて放つ魔法は使えるんだがな」

精霊と同じく、人間でも気合いと根性で魔力を練れるというのが俺  
の持論である。

「あう、そんなの使えるのルイ様だけですよ。セルはこんなとこ  
じゃ無能もいいとこですよ」

「あらあら、セルフイから精霊魔法を取つても”愛嬌”が残るわよ  
？」

「いや、せめて剣術とか残せよ」

うん、やはり、この三人は退屈しない。  
共に旅をする仲間としては最適であろう。

「それよりもライズ、思い出さないか？」

「ああ、一度、俺もそいつ言おうと思つてたんだ。いやあ若かつたな  
あ…あの頃は」

そう、俺とライズは以前一人でこの森に入った事があった。

「あの頃はよ、お前の事、女だと騙されてたよ

俺は騙してない。

こいつが勝手に勘違いしてただけだ。

それに気付いて面白そつだから黙つてたのが騙してると言わればそれまでだが。

「えー！ ルイ様とライ君の一人で！？」

そこで二人の愛情は芽生えたのつ…そこに違いないです！」

この女は黙つてれば妖精ように可憐なのに、脳内は腐つてているのだ。

「それじゃあ、今回は私とセルフィの愛が芽生える番ね

そしてこの女は遊廓の女共の数倍は艶やかで美しいのに、こんなだ  
し。

「……セ、セルはそつちの趣味はないです。

それよりルイ様とライ君の馴れ初めが聞きたいなつ

必死に話題を逸らすセルフイだつた。

ま、たまには昔を振り返つてみるのもいいだろ。

今まで散々、未来しか見つめずに生き舞いできたのだから。

\* \* \* \* \*

ルイシヨン＝ラジノワール

7歳の春

「ルーアーちゃん、あーソーポー」

ライズ＝アッサム 8歳

「ああ、しつじこのですよ。おれは父上の本をよんでも、勉強しているのですよ」

「ルイちゃん、なんで女の子なのにおれ、なの？  
勉強なんかより、体づかしたほうが楽しいよ！今日は不浄の森を  
たんけんしょ！」

そう言われてルイシヨンはピクリと反応する。

不浄の森

精靈の立ち入れない程の障氣を放ち続けていると、父の本に書いてあつたのだ。

「そんなところに入つたらいいかんのですよ。教会にばれたらお説教、ですよ」

「ルイちゃんは眞面目だなあ。バレなければいいんだよー。こつそり行つて、こつそり帰つてくる。これでいいんでしょ？」

ライズが不眞面目、といふかやんちゃすぎるだけなのだが、好奇心旺盛なルイションは行つてみたないと想い始めていた。

「ホントに仕方のない奴なのですね。でもバレた時はライ君にむりやり連れてかれたつて言いますからね」

「やつこなくつちやー！」

途端に目を輝かすライズ。

子供は実に単純明確なものである。

不淨の森

「うつ、けつ、じつ、ふんいき、あるね」

「怖いんですか？なら帰つてもいいのですよ……」

役立たずめ（ボソッ

「いや、いやいやいやいや、」そぞらに全然怖くないよー兄上から  
パクつてきた剣もあるんだーわあ行こうか！」

2時間後…

「ライちゃん、」

「知りません」

迷子だった。

更に2時間後

「わっく、わっく、はは、はは…」

「うるせーのですよ。まっすぐ歩いてれば外に出られるはずですよ」

泣いていた。

更に2時間後

「うー、うー、うー、ライちゃん、もつまひへりだよ。ぼくたり、い  
じでしんじゅうのかな？」

「一人で死ぬといいのですよ。おれにはまだやる口があるのです。  
こんなところで死ぬはずがないのですよ」

詰んでいた

それから二日後の夜

「ルイちゃん、おなかすいた」

「自分の足でも焼いて食べればいいのですよ」

「それじゃあ、歩けないよ」

そんな事を言いながら「ラフラフ」と歩く少年一人。

ガサガサ ザワザワ

「つーな、なんかいるよルイちゃん」

「魔獸でしょうか？」

「グガガオオオオオ！」

冒険者ギルド

Eランク指定モンスター

ルーグル＝ラビットが現れた！！

草食系モンスター

凶暴性は皆無で非常に温厚な性格だが、逃げ足だけは速い。  
その肉はとろけるような柔らかさと独特の香りがして美味。  
また愛らしい姿をしているので愛玩動物として飼育されている」と  
もある。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ嘘だつ！－！」

「こんなのがルーグル＝ラビットだなんて、こんなの絶対おかしいよ  
おおあああああ！－！」

## 第5話（後書き）

11 / 22

なんで女の子なのおれ なんで女の子なのにおれ

恥ずかしい…

\*。\*。\*。\*。\*。\*。\*

仕事の合間にちまちま更新しますた。

次でいよいよヒロイン登場です。

きっと愕然とします。悪い意味で。

ライズ＝アッサム

19歳

ひょろりとした長身ながみだが筋肉は付いている。

茶髪に薄桃色の眼なんかかわいいね

ルイションの幼なじみで過去を知る人物、といつ点に置いて一田置かれている。

ルイション田当ての女性団員や男性団員（？）によく質問されてい る光景を見る。

纏う雰囲気がバカっぽいけど意外と頭がいいのはルイションに軍略 を叩き込まれたから。

主に槍を使って戦う、歩兵隊の総長。

カイゼル＝サーデレンシア

33歳

南東の没落貴族の出身。

そのため、南東訛りがひどい。

黒獅子旅団の兄貴分的存在で、武術の師範、そして軍隊の総司令官。余りにも彼に権力が集中したため、実質的なリーダーは彼なのでは？という声も多く挙がっているが、彼はこう言へ。

ルイションは黒獅子旅団といつ国の国王である、自分は聖騎士にして将軍なのだ、と。

聖騎士、王に忠誠を尽くし守る

將軍、王に仇なす敵の悉くを滅ぼす

確かに自分は全ての軍隊を動かすことを許されているが、それは黒獅子旅団の象徴、団長ルイションの意志を代行しているだけだ、と。

そもそも黒獅子旅団とこつのは既にして一つの街になつており、それなりに発展している。

領主たる団長の仕事の殆どは内政になつてしまつているのだ。

## 第6話

ちびっこ死神は今日も首を狩る  
馬鹿は死んでも治らない

\* \* \* \* \*

そだー！うそだー！うそだー！

こんな絶対おかしいよおおああああー！ー！

少女はその奇声を聞いて目を覚ます。

黒い毛皮を纏つた少女の身のこなしが、正に獸そのものだった。

「……つるやいなあ、安眠妨害は首ちょっとの刑つての、この森の常識なのになあ」

なにやら物騒な事を呟きながら右手に魔力を注ぎ込む。

そして顕現したるは少女の背よりも長い、まるで刀のような刺身包丁。

「さて、今日も今日とて、首狩り！」の始まりだあー！

どこか壊れてしまつたような陽気な声と目で、森を獸の様に木から木えと飛び移つて目的地（処刑場）へと向かつて行く。

\* \* \* \* \*

「ルーグル＝ラビット、お前のな毛」<sup>（）</sup>はグガオオオオ！…じゃなくて、きゅううん、だらつが！…！」

そう言つて兄から借りてきたといつシヨートソードで斬りつける。

「わあ、どうしたのです？いきなりやる氣ままんなのですね」

「ほくはわすれはしない！ルイちゃんと一人でそうげんでルーグル＝ラビットをぐぜん見つけ、ひつしにつかまえて、一人でかわいがつたあの日のことを！…ルイちゃんもルーグル＝ラビットもかわいかつたんだあああ！」

「これは重傷だ。  
もうダメかも。」

完全に暴走中なのです。

しかしライズの全力の一撃も巨大ルーグル＝ラビットが軽く身を動かしただけで見事に受け流される。

そしてくるんと回転、尻尾叩きつけ！

「グヘッ…ウフワアアアア…！」

直撃。

軽く10メートル以上吹っ飛ばされて大きな木に激突。

「ライ君ー！」

急ぎ駆けつけたが、その姿を見ると絶望的になつてくる。  
頭は辛うじて無事だつたが、胴体部分はまるで爆発したかのよつこ  
色々といじめになつていた。

「ライ君、死んだら黙田、なのですよ。ライ君が死んだら、釣りも  
戦盤も駆けっこも、チャンバラも出来なくなつてしまふのですよ…  
！」

「…それ、ぜんぶ、ぼく、まけたよね…ぐふつ」

「ライ君ー！ライ君ー！」

「げほつ、げほつ、ふ、うれし、いな。こんなぼくなんかの、ため  
に、ライちゃ、がないて…

ライちゃ、ちこちこ、つたえたい、こと…「ひびきひびき」

「ライ君…ひつ、ひつ、なにですか…ひつ、ひつ…」

「…だ、い、す、れ…」

「…ら、ライ君ー…！」

おれもね、きみに伝えなきやいけない」とが、あるのですよ…。  
おれ…じつは…

「…男、なんだ…」

沈默

その沈黙は今までの何よりも重く、ルイ・シエンにのしかかる。死人は喋らない。そんなこと、聰いルイ・シエンには分かつていたことだったのに、涙が止まらない。

「……………え？、おとこじょ。」

- え？

レキスのあとがき

卷之三

アツ――――――――――――――――――――――――

ライブ三ツサム

この日8歳の春が終わりを告げた。

\* \* \* \* \*

だが、そんなこと（笑）は関係なしに物語は進んでいく。  
来るべきエンディングに向かって——

「やあやあ、空気を読まずに失礼するよ。

ついたいせの語なんだか

こんなのがいいよおあああああ！！

本居宣長著　浮城子　第一回

セセセセ、リリリリリリリリリリリリ

うん、君だね。既にして死にかけてるけど、間違いな

残すのも失礼だし…仲良く一緒に逝きたいよね？うんうん…そうだよね！そうに決まってるじゃ、そゆわけで——

...サミナテ

言い終わるや放たれる濃密にして圧倒的な殺氣。

当然の事ながら戦場にも出向いた事のない少年二人が、これほどの殺氣を自分に向けて放たれるのは始めての経験だ。

まさに背筋が凍つて何も、口を挟む事さえ、出来ない。

だが

「グガオオオオオオオオ！」

まさに死神の鎌が首を浚おうとした、その瞬間だ。

＝ラビットが吠えたのだ！

卷之二

一閃

「口うりといひがるのは愛嬌などどこに忘れてしまつた狂兎の首。

「はあ、なんかもう、お腹すいた。」

今田は兎の丸焼きね。

じゃ、ばいばい。早く帰るんだよ、わたしの気が変わらない内に、ね。

アハハー、今日から兎には感謝して生きなきや、だね？アハハハ…」

た、助かつた、のか…

生きた、心地がしなかつた。

「あの、ぼくも、つむぎのまるやき、食べたいな」

「「えつ？」」

「……えつ？」

## 第6話（後書き）

あああ、狂つてるもうキャラが全般的に狂つてる

リリー・スレンジャー・ヘヴンアークス＝レムレム

年齢不詳

名前が圧倒的に長い。世界一名前（性ではなく）の長いギネスに挑戦すべき人物。略してリリー。だれにも本名を覚えて貰えない悲しき定め。作者すら覚えてない。

謎の多い団員だが団長からの信頼は厚く、獅子旅団の暗部こと諜報部隊の隊長を勤める。

使用武器は短剣、ショートソードなどを金属製の紐、所謂ワイヤーで繋いだものを使う。

攻撃範囲が広く、かなり変則的でしかも使い手が彼女とあっては攻略は不可能とも言われている。

だが魔法には弱く、焼いて熱伝導、感電させる、という手も使える。異様に器用な彼女はその位の対策はしていそうなのだが。

三度の飯より可愛い女の子が好きという人。

その美貌は遊廓の女共も裸足で逃げ出すとかなんとか。

ポーカーフェイスで表情から感情の変化が全く読み取れない。賭博では団長ルイ・シェンを除くとほぼ最強。

現在はセルフイを狙つてゐるらしい。

セルフイ＝ハートーン

16歳

若手女性団員として現在人気絶好調のアイドル的存在。

だがその脳内はアツーな事になつてているのはあまり知られてはいない。夢を見ていましょう。その間は幸せです。

精霊魔法の使い手で水の精霊、風の精霊と契約を交わしている。また、弓も多少使えるらしい上なにより料理上手でもある。（弓と料理になんの関連性が！？）

崩壊する自身の世界

そして物語は失速する

\* \* \* \* \*

「ふふふ、流石ライ君ですねっ」

「くつくつ、違いないねー。

…ん？てゆーか、腹の傷はどうなったのかな？」

腹の傷はどうなったんだ？

はは…それは、俺のトラウマだから止めて下さい。

なんかルイが男だつて暴露してから痛みとかどうでもよくなつてた  
んだけど、やっぱ死にかけてたのは間違いなかつたんだよなあ。

あの治療…？だけは一度と体験したくない。ああ腹痛くなつてきた。

「森の死神か～。まだいると思つてるかい？」

リリーが言つ。

リリーの名前つて長すぎるので誰も覚えてないんだよな。

「ああ、あの少女は…自分の生き方を簡単には変えられない、そん

な人間だった

「そんな、森を出て街へ行けば、もっと人間らしい生活が出来るのでは…」

ところが、駄目なんだ。

あの子は、とても今の世では生きていけやしない。

教会の教えー黒は破滅の象徴である

そんな下らない教義が、あの子を狂わせてしまつたんだろう。

\* \* \* \* \*

「まあ、適当に座つてよ」

「あ、うん、ありがとう」

「ありがとうなのですよ」

ぼくの空気が読めない発言が上手く行ったのだろうか。

連れてこられたのは、意外なほど、しっかりとした作りの木造の家

だった

生活の匂いがほんの僅かだが漂つているのが分かる。

因みにお腹の怪我は、結果的に言つて、この女子に治してもらつた。

「ええと…あなたはここでいらっしゃるのですね」

「ええ、あー、私のことはサクラでいいよ、”白衣の天使”サカモト、サクラ…いやー、貴方達流な言ひならばサクラ＝サカモト、ね！」

「サクラ、ちやん変わった名前だなあ。

黒髪黒眼、黒は破滅の象徴つて司祭さまが言つてたのを思い出した。この子は黒髪わ膝辺りまで伸ばしている。司祭さまに言わせたら、まさに破滅そのものなんじやないか、と思つた。

白衣の天使といつのがよくわからない。

「サクちゃんは、一人なの？家族は？」

あう、隣のルイちゃん…ルイ君に睨まれる。

サクラは一瞬、顔を強ばらせたが、

「きっと、もう一度と会えない」

と云つた。

「そつかあ…じゃあひー、ほくたちが家族になつてあげる…サクちゃんは、何歳？」

「16セ…いや、数えてないから、分からない…。まあ、この森で生きてぐのに年齢なんか関係ないしね？」

自分の年も数えてないの…?

「おれの、1こ下か、2こ下くらい、じゃないかな?たぶん」

「じゃあー、えーと、6さいか、5さい?」

少なくとも、年上には絶対に見えないので間違ってはいけないのではないか。

「じゃあ、5歳つてことにしよう!女の子は若い方がいいからね。とにかくで、お嬢さんとお坊ちゃんの名前は?」

はつ、ぼくとしたことが自己紹介を忘れていた!  
隣を見ると、ルイ君もしまつた、という顔をしていた。

「ぼくはライズ=アッサムって言つんだ。  
つい、こないだ8さいになつたばかりだよ。」

誕生日、ルイ君は手のひらサイズの、なんだか不思議な物体をくれたんだ!  
うにうにしてて、触つてみると弾力性があつて…半透明で…不思議な物体。

因みにその時の言葉は

えつ誕生日なのですか?へー良かつたのですね。あ、ちょうど失敗作が一杯あるから、良かつたら持つてけなのです。

である。

「おれはルイ・シモン＝ミジンホールというですよ。

あと、おじょひさとはやめてくれです。おれは、男なのですよ」

はつ、そうだ、ルイ君は男の子。

あああ、ほくはこれから何を糧に生きて行けばいいのだろう…。

「えつ？ 男の子なの？ へー、ほほー、ふむ。

キミ、あんまりにま可愛らしいから女の子だと思つたよ。喋り方もチュー可愛いし、私も真似してみるですよー。」

「しゃべり方もちゅーかわいい…？ 普通のけいじゅべつてるだけなのですよ」

敬語なんてルイ君にはまだ早いんじゃなかろうかと思つた。

「アハハ、ですよつとか、付ければ敬語になるつて思つてるの。敬語なんて使う必要ないんだよ。敬語は尊敬する人と話す時だけでいいよ」

「へー、そうだったのか。じゃあライ君なんかに、けいじで話してたなんて悔しい」

えつ？ それってどうこいつ意味？

「うん、全くその通りね。あー肉焼けたー！」

美味しそうな匂いが漂つてくる。

三日間、なにも食べていなかつたのでもう空腹で死にそうだった。

「はい。この鬼のおかげで、貴方達の首が繫がつてゐるんだよ。感謝

して食べるといいかもね！アハハ！」

その冗談は笑えないと思つんだ。  
でも感謝します。

ルイ君はここにきてから、ずっと同じ目をしていた。  
知りたい、という目だ。

分からぬ事があるのは、許せないんだとか聞いたことがある。

「この、ルーグル＝ラビットはなんでこんな大きいんだ？  
きっとこの霧のような障気の影響だ。

じゃあ障気の正体は？

教会の伝え通り、呪われた地だと？

バカバカしい。

もしかして魔力？

どこから大量の魔力が？

なんで精霊が入つてこないんだ？」

なんかブツブツ言つてる。

こういう時のルイ君は、何を言つても無駄なんだ。

「アハハ、キミ、将来は学者さんだね？

想像通り、この霧は魔力だよ。

じゃあヒント！

昔、強い魔女がこの森へやつてきた。

その時は至つて普通の森だつた…みたいな？」

「はつ、この森を包む魔力は、その魔女の魔力だということなのか  
？」

「その通り～！」

魔女は不老不死の研究をしていて、行き着いたんのが、この霧。自分の意識を全魔力に抑えこみ、霧に変えたの。もちろん、肉体は死んでしまったのだけれどね？」

うつと、よくわかんないけど、ルーグル＝ラビットの肉はとても美味しい！

柔らかな食感、程よい脂…味は同じみたいだよ！ライ君ー！

「ど、どうことは、この霧は、生きていると…この霧、全体に一つの意思があるということ？」

そもそも、それを知る貴女は何者なんだ？」

## 第7話（後書き）

11 / 22

トライウマから トライウマだから

\* \* \* \* \*

中途半端だけど眠い…

ぶっちゃけ見直しちゃんとしてないので、誤字脱字が大量にあります。すでに自分で幾つかは直したけど…  
発見してしまったらコツソリ教えてくださいな( ^\_\_^ )  
ではでは

## 第8話

白衣の天使は死神で  
未知は未知として理解する

\* \* \* \* \*

「何者と聞かれれば、こう答えるしかないね！  
うん、白衣の天使、と！」

⋮

黒獣の毛皮を纏い  
振るう剣は無慈悲に首を狩る

彼女はまさに死神だつた。  
今、この瞬間にでも彼女はルイシェン達を容易く殺すことが出来る  
だろう。

命を他人に握られている事への恐怖。  
未知なるものへの強い欲求。

それがルイシェンの思考を鈍くした。

「うちは眞面目に聞いてるんだ！」

空気が割れた音を聞いた気がする。  
ひやりと首に冷たい感覚。

ピキ

「『』飯は楽しく食べるものだよ？ いつただつきまーす！」

「…すまん、ですよ」

隣を見やると幸せそうに兎の肉を頬張る友の姿。

なんて脳天氣なんだろ？ 一度も死にかけた人間の姿とは思えない。大物だ。

「別に、敬語を使う必要はないんだよ。」

ただ、つるさいのは大嫌いなんだよね！ ついつい首を跳ね飛ばしたくなる。そう思わない？ 思つよね！ ジャあ… 黙れよ」

黙つて兎肉を食つことにした。

\* \* \* \* \*

「ふう、『』ただつきまーす」と

？

ライ君と二人で不思議そうな顔をしていると、サクラが説明してくれた。

食事の前には「『』ただきます」

食事の後には「『』うちそつさまでした」

と手を合わせて言うのが彼女の故郷の習慣らしい。

食糧に感謝を込めて、また料理を作ってくれた方へ感謝を込めて…

ところの意味らしい。

「『アーリア』でした？」

「うそうそ、かわいいね～…やっぱ子供は癒されるね！いやほんと

なら、殺そうとしないで頂きたいものである。

「ね、ね、サクちゃん、あの剣見せて…」

おお、勇気ある自殺志願者が一人。

だけどあの、いきなり現れていきなり消える不思議な剣を見てみたいといつのは俺も同じで。

ライ君が首を跳ねられるにしても剣は見れるので黙つておくこととする。

「あの剣？…ああ～～これね！」

右手を凝視する。

手のひらに光が集まり、一瞬にして剣が形成される（）。

見た感じ、全くブレがない。

いや、実際に首に当たられたのだから分かる。あれは現実の冷たい刃物そのものだった。

以前、屋敷にきた魔導士に見せてもらった魔法剣というものは、もつとぼやぼやしていて剣の形をした何か、といった感じだった。

「これは剣じゃないよー。包丁なんだよ。

我がサカモト家の家宝”首狩り包丁”…のレプリカ

なんて物騒な包丁なんだろう。

それを家宝にするサカモト家ってどんな家なんだ。しかも偽物かよ。形は確かに包丁のよくな感じだ。

片方しか刃がなく、鍔もないし柄も木製である。だがこの長さは異様だ。これで野菜を切つている姿が微塵も想像出来ない。まだ首を狩つている姿の方が想像しやすいというものだろう。

この波打つ模様は何か、と尋ねると、知らないよ。と残念な返答が帰ってきた。

「これは、魔法剣、なのか？」

「残念！正しくは魔法包丁だね！私が一人で寂しがっている時にね、魔力に、家族の温もりが欲しいと、強い想いをのせてみたらこれになったの」

無茶苦茶な話だ。

そもそも首狩り包丁から家族の温もりを感じ取ることなど出来やしない。

「この柄には母さんの温もりが、この刃には父さんの温もりが、いっぱいに詰まっているんだよーーー！」

父さん！父さんーーー？

父さん斬られたのーーー？

しかも母さんにーーなんてトラウマだ。

そんな事があったのでは、この子が狂つてしまつのも無理はないだろーーー。

「へえ～、魔法で剣、うつん包丁を作るなんて、初めて聞いたよ。他には何か作れるの？」

「そうだな～、生き物以外ならなんでもいけちゃうかもね～そもそもこの小屋も私の魔力で出来てる訳だし。アハハ～よーし、お腹膨れて気分もいいし、特別に自慢してあげるねー！」

サクラに促されて小屋の外にでる。

どこからどうみても本物の木で出来たものにしか見えない。

「この小屋から半径1キロ以内は、わたしのテリトリー、つまりわたくしの魔力支配域ってわけ。

ん？ わかんないかな。

ここから1キロ以内なら「こ」でも魔法が放てる、といつ意味だよ」

そういうて右手を掲げる。

ズドン！

少し、離れた場所に巨大な剣が突き刺さる。

まるで神が地上に裁きを与えたかのような所業だった。

中央王都の、教会の塔より大きい…。

それだけではない。彼女はこの大魔法を何の詠唱もなく、魔法陣を描く事もなく、刹那の隙もなく、そう、まるで、呼吸をするかのように自然さで放つてみせたのだ！

そして、これだけの力を見せておきながら、全く疲労感を感じさせない。

まさに規格外の化け物だった。



## 第8話（後書き）

11 / 24

始めて聞いたよ！ 初めて聞いたよ！

… o\_r\_z

\* \* \* \* \*

これが、異世界転生のテンプレ的な能力らしいですよ！

## 第9話

少年と少女は夢見て誓う

\* \* \* \* \*

「すごい…」

あまりにも衝撃的な力を見て、それしか言葉が見つからなかつた。自分も魔法は使えるのだ。

それも生まれた時から、精霊の力などに頼らざるとも、だ。それ故に、呪われし忌み子などと蔑まれたりもするが俺は全く気にしなかつた。

奴らは嫉妬しているだけだ。生まれつき獅子としての力を持つ、この俺に。

だが、今この馬鹿みたいな魔法を見せられ、自分もまた、奴らと同じ矮小な存在なのだとということを実感させられている。

彼女、サクラ＝サカモトこそが真の獅子だったのだ。

「どうだーーすごい? まいったか? アハハハ

「この森で障気となつて生きる魔女。

それこそがサクラの正体…!?

「それは違うんだよ、ルイション君。

わたしがこの森に来たのは多分、5年くらい前だし。来た時から森の主様は障気としてこの森に居たんだよ。まー連れてこられた当時は赤子だったから、いまいち覚えてないんだけどねー！アハハハ！それにしても、キミの思考回路は子供の割に、怖いくらいに理路整然としているんだね。

キミ、もしかして、わたしと同じ転生者なんじゃないかな？

モシモーシ、ニホンゴワカリマスカー？アハハハー！」

障気の魔女ではない。

転生者、と彼女は言った。

そして俺も、そうではないのか、と。

馬鹿みたいに陽気な口調と、その眼にはほんの、ほんの僅かだが期待が込められているように感じる。

だけど。

「…？」

言つている意味がよく理解できないこの頭が恨めしい。

もう少しで、サクラの秘密を知ることが出来る。そんな気がするのに。

「…アハハ

ごめんねっ！気にしないで。

それより、わたし森の外のお話が聞きたいな！

わたしは生まれてからすぐ、この森に「ミミみたいに捨てられちゃつたからで、この世界のことよく知らないんだよね。

森の主様は生きた時代が違うし、魔法の事しか話してくれないしー。ねえ、キミはどんな世界を見てきたのかな？

身なりがいいし、華やかな貴族の世界かな？』

森の主様とやらば、俺にも会話できるのだろうか。  
もし、サクラのあの途轍もない魔法…それが主様から教わったもの  
ならば俺にも…。

いや、それは今はいい。

今はただ、サクラの望み通り俺の事を話してみよう。  
その後、転生者だといふ、彼女の話が聞けたらいいな、と思つた。

\* \* \* \* \*

思えば、俺は生まれた時から、この世界を恨んでいる。  
ただ精霊に頼らずとも、自立して魔法が使える。ただそれだけで呪  
われた子だなどと後ろ指を指される世界。  
それだけなら俺は気にしない。  
だが、そのせいで俺の母は気を病んでしまった。  
自分の腹から呪われた子が生まれたと言われば、誰だって気を病  
んでしまうだらう。  
ならば救うのも、俺だ！

精霊宗教など、実体は王族、貴族の金儲けに過ぎないことを俺は知

つて いる。

イリシエン王国の初代国王は何体もの精靈と契約を結んだ精靈王だつたといつ。

そこから精靈と契約を結ぶ秘技は王家に伝承され貴族に渡り、その貴族が宗教を興した。

精靈宗教の現在の教皇は王の弟で、そいつの息がかかつた貴族達が幹部になつて いる。

幹部は教会にて魔導の才ある者を選別し、神に選ばれた子だ、なんだと言つて精靈と契約させる。

そして精靈魔法が使えるようになれば民衆は神の奇跡だと少なくな い金を落としていく。

教会など燃やしてしまおうかと、なんど思つたことが分からぬ。だがそれをしてしまつと、いくら現王妃の実家であろうと、ヨジエ ワール家は爵位を剥奪され、母の病は間違ひなく悪化してしまつ。

父はただ、元気な姿を見せてやればいいと言つが時一刻と弱つてゆく母を見てそんな悠長なことが出来るはずがない。

とはいえ俺が使える魔法といえば、指の先から小さな火を出したり、グラスの中の水を凍らせたりと役に立たないものばかりだ。そもそも母の前で呪われた力なんて使えるはずもなく、父に買ってもらつた医術の本を読み漁る毎日を送つていた。

\* \* \* \* \*

サクラは話していく間、相槌を打つだけで、特に口を挟んではこなかつた。

ライ君はあの巨大な剣『神の裁き』を見に行っている。  
また兎に狙われなければいいのだけど。

「うん、キミ…ええと、ライション君、だっけ」

「ライでいいよ。家族とライズはみんなそう呼ぶから」

家族とライズ以外は、呪われた子やら悪魔としか呼ばない。

「そう、ライ君。キミはわたしと似ているね。  
わたしも、生まれた時から魔法が使えたんだよ。それに、この黒髪  
黒眼が最高に不吉なんだってね！アハハハー！」

キミに魔法を教えてあげる。

お母さんが、元気になる魔法。

それはね…

生まれきて、幸せだ

そう言つてあげること、なんだよ。

お母さんは、キミの事が心配で心配で、気を患つてしまつたんだね。  
私が産んでしまつたばかりに、この子は、教会や周りの人間に呪  
われた子だなんて言られて、なんといつたらいいのか…  
そう思い詰めて、思い詰めすぎて、氣を患つてしまつたんだよ。

だから、教えてあげなきゃいけない。  
わたしは幸せです。

お母さん、産んでくれて、ありがとう…って…

いつの間にか、自分が泣いている事に気が付いた。

サクラも泣いている。

俺より、余程つらい境遇のサクラだが、確かに似ているのかもしれない。

これも魔法、なのだろうか。

どれだけ虐められても涙一つ見せなかつた俺でも、この涙を止めることなどできやしない。

「わたし、前世ではね、小さな精神病院で白衣を着て、キミのお母さんみたいな人たちとお喋りしてたんだよ。

少しでもみんなが元気になるように、と思って、わたしは自分のことを”白衣の天使”だなんて自称してたんだよ。

「きっと、この国にはキミやわたし、その両親みたいに、気を病んでしまつている人たちが、まだまだ居るんだろうね…」

ねえ、その人たちを救つてあげるには、どうしたらいいのかな？」

「サクラが、さつきみたいな魔法を使ってあげればいい

「わたしじゃ、だめだよ。

この黒髪、黒眼じゃあ、この國の人たちは白衣の天使には見えないよ

なら…

「なら俺が、俺がこの国を変えてみせる。

サクラが堂々と都のあるけるような国にしてみせる。

そしたらサクラはまた白衣の天使に戻れる。そしてサクラなりきつ

と、沢山の人を救える「

これは誓いだ。

今は”森の死神”であるサクラ＝サカモトとの誓い。

いつの日かきっと

彼女を”白衣の天使”に変えてみせる。

## 第9話（後書き）

アハハハ

まず自分の精神を治療してほしいものですね。  
首狩り首狩り！

サクラの前世エピソードはまた別の機会に紹介します！

## 第10話

戦争の音色と殺戮

そして再会

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

イリシエン王国・ヨジエワール領

（ワーレス砦）

ガツキイイン

ザシユツ

バシツバシツ

剣が響き合つ音  
槍が肉を貫く音  
弓の弦を弾く音

戦場は音で溢れている。

遅れるなあ！  
助けてくれえ！  
敵を焼き尽くせ！

小隊長の怒鳴り声

兵卒達の叫び声

精靈魔導士の詠唱

「いいかア！これより騎兵隊、歩兵隊は皆より打つて出るぞオ！」

弩弓隊、魔導隊は皆より攻撃を継続しろ！

突撃イ！！！」

黒獅子旅団、軍司令官カイゼルの号令が戦局を塗り替える。

国を相手に寡兵で戦うことを想定して訓練された兵達は一人一人が、正規の軍より圧倒的に強く、連携も見事に取れている。

司令官自ら前線で槍と剣を振るい、兵の志氣は絶頂だといえる。

「歩兵隊は騎兵隊が狩り残した敵を残らず殺せエ！！」

騎兵隊の目標は敵軍隊長にあり！敵陣を一気に貫くぞオ！我に続けエ！！！」

帝国暦1895年

後世に残された黒獅子旅団の最も古い叛乱は北部領、黒獅子連合の圧勝に終わった。

\* \* \* \* \*

北部軍と王国軍の第一戦に決着が着いた、その一週間前

### 「不浄の森」

「森の死神…ね。

黒髪、黒眼、圧倒的な魔力。

聞いたことはあつたけど、実在していたとは、びっくりだねこれは

昼も薄暗く不気味な雰囲気の漂う、不浄の森を歩く四人組  
黒獅子旅団、団長のルイシェン＝ヨジエワー  
ルを筆頭に強者揃いのメンバーだ。

ルイシェンは不浄の森などおかまいなく魔法を使い、その剣筋は速  
く鋭い。

ライズの槍は、過去に苦渋を飲まされた大兎の心臓を何度か貫いて  
いるし、リリーのワイヤーを通した短剣、その変幻自在な攻撃は獸  
に到底理解できるものではない。

一方、セルフィはなぜか魔獸に懐かれていた。

「ははあ、まさかあの”サクちゃん”の事まで耳に入っているとは、  
流石は諜報隊長殿つてか。

いやあ、こわいこわい。これじゃあ隠し事なんかしたら即弱みを握  
られてしまいそうだ

「ふふん、ライズが通つてゐる遊廓はヴァイスの南二丁目。金髪碧眼の可愛い系ルピシアちゃんがお気に入りだ。

金髪碧眼のルピシアちゃん…か。

貴様まさか、まだ大将のことが忘れられないのか！？

ブフウ…！

「いや、いやいやいやいや、ちが、違うぞ！  
てかなんでそんな事知つてんだよ…！いくらなんでも人のプライバシーに入り込みすぎだと思うぞ…！」

ルイ、そんな蔑んだ目で俺を見るな！だいたいお前が騙してたから悪いんだぞ！そのせいで旅団では俺がそつち系の人間だと認識されちまつてるじゃねえか！

セル！お前まで、そんな哀れんだ目で俺を見るなあああ…！」

「ライ君、素直になつた方が楽、ですよ？」

はあ、こいつら腕はいいんだがなあ。

こんな騒がしくしてたら、いつ死神に首を狩られてもおかしくないぞ。

いや、そこら辺は、サクラが多少まともになつてゐることを祈るしかない、か。

いや、そもそも今回の目的は…。

「お前ら、少し黙れ。そろそろ彼女の魔力制御範囲に入る。  
つまりここから先は、彼女の狩り場の可能性が高いんだ。  
あんまりうむをくしてると、いつの間にか頭と胴体がサヨウナラつ  
てことになる」

「 「 「 「了解」」

まあ、言えば素直に従ってくれるのは有り難いことだ。

あれから11年か。

彼女は16歳くらいになつていてる。

お前は、少しは変われたか？

俺は結局、母を救えたのだろうか。

あの日誓つた夢に少しあは前進しているのだろうか。

「 ”森の死神” サクラ＝サカモトに接触し、コアン王子が幽閉されている場所に心当たりがないか聞く、それだけだ」「

そう、今回の目的はあくまでコアン王子の確保にある。  
この世界はまだ、彼女に優しくはない。

誓いが果たせる日はいつになるやら分からぬが、コアン王子さえ発見できれば、間違なく大きく前進する。

北部は完全にイリシエンから独立宣言をし、コアンを王として迎え、教会を排斥してたんまり溜め込んだ金を全て民の元へ返還する。教会の幹部を捕らえて拷問し、王家の秘術、つまり精霊との契約方法を完全に把握する。

その後、新王家直属の精霊魔法支部を建設し、そこで教会の代わりに無償で才能の有無を知ることが出来るシステムを作る。

もちろん、王家と貴族と教会、この三つの関係性を民に知らせた後にだ。

魔法が生まれつき使える子も、髪が黒くとも、眼が黒くとも、呪わ

れた子なんかじゃない。むしろ祝福された子なんだと、民に説くのは難しいことかもしれないが、やるしかないだろ？

ボトツ

ハハハハハハハハ

木の上から、何の氣配もなく

降ってきたのは

腐った人間の、生首

「あるつ口へ 森のなか  
ルイ君にへつてね～！アハハ～

お久しぶりだね！

あれから何年経ったか数えてないから分かんないけど、その魔力、  
ルイ君だよね？

槍持つたアホっぽいのはライズ君だよね！どう？当たり？

女連れとは、なかなかいい度胸してるね。しかも絶世の美女と超絶  
美少女！

さあさあ、此処に来たからには首を狩られても文句は言えないんだ  
よー。アハハハー！」

以前と変わらず、無邪気に喋り終わつた途端、途轍もない殺氣を放  
つてくる死神。

な…に…変わつてなさそつ！？

## 第10話（後書き）

11 / 24

実在していとは 実在していたとは

毎回間違えて「めんなさい」おんな

報告感謝です！

王子と死神、一つの再会  
人はそう簡単には変われない

\* \* \* \* \*

身軽に樹の上から降りてきた、底抜けに明るい少女と向かい合いつの  
は、漆黒に身を包んだ四人。

「久しぶり、だな。サクラ」

ルイションはそう呟くと一ヤツと睡つた。

サクラは戦慄するほど美しい少女へと成長していた。  
この森のなかで、どのように身を清めているのかは察することが出  
来ないが、肌は雪のように白く、その艶やかな長い黒髪は、風を受  
けてサラサラと揺れている。

「うん、久しぶりだよねー！  
ルイ君にライズ君、なんだか大人っぽくなつたねえ。わたしは置い  
ていかれてしまった気分なんだよ。

ん？ああ…この首が気になるんだ?  
やつら、なんだか大人数で森に入つてきてね、中心部すなわち主さ  
まの屋敷へ向かつてたんだ。

まあ、そこまでは割とどうでもよかつたんだけどね～。アハハ。  
わたしの領域に入ってしまったのが運の尽きなんだよ。

そして、キミ達もね？

ガキイイン！

鎌鼬のような勢いで、ルイションの首に迫つた剣を払つたのは、ライズの槍だった。

ライズの槍は、普通の槍ではない。  
きめ細かく虎の彫刻が彫られた柄は鋼鉄製、そして長い穂先は綈煉金という特殊な金属で造られた逸品なのだ。その重量は6貫（22kg以上）にも及ぶ。

ルイションの隣にいたとはいえ、あの神速の速さで迫る首狩り包丁をその重い槍で防いでみせた筋力、判断力、胴体視力は、誰の目から見ても超一流武人の成せる技であった。

「うつひやあ。参つたなあ～アハハ。

ライズ君、す～いんだよー。

それと自分の首が狩らそつだつたのに眉一つ動かさない、ルイ君にもびっくり。

男子三田会わざれば刮目して見よ！ってわけなんだね。

そつちの美女さん一人もただ者じやないようだし…「うん。

ここはいいものを見せてくれたライズ君に免じて、我が家に案内してあげるよ。

既にお客さんというか、居候さんがいるけど気にしなければいいんだよーアハハ」

途端に殺氣が收まり、明らかにほつとした表情になる面々。

四人には彼女の剣が、全く見えていなかつた。

ライズはほぼ無意識に自分の大将であり希望であり、幼なじみでもあるルイションの首を守つたのだ。

そのルイションはまず最初に首を狩られるのは多分ライズだろうな、と思い込み、リリーはサクラの観察に気を取られ、セルフイはあまりの展開の早さに付いていけていなかつたのだった。

「ああ…死ぬところだつた。  
すまんなライズ、助かつた」

\* \* \* \* \*

小屋に入ると、白い外套に身を包んだコアン王子殿下がいた。

「わあお

私は思わず、呟いてしまつた。

自慢ではないが、我らが黒獅子旅団の諜報隊は優秀である。団長ルイションはなによりも情報を第一に求めるからである。敵対組織について知らないことがあれば完膚無きまでに調べ、絶対的勝利を手に入れる。

その優秀な諜報隊員たちがいくら探し回っても見つかなかった人間が、こんなにもあつさり見つかってしまうとは思つてもいなかつたのだ。

しかも呑気に寝転がつてゐる上に、視線はなにやら妖しげな本に集中しており、開いた扉へ振り向きもしない。

サクラという少女を先頭に、ぞろぞろと小屋へ入ると、ようやく顔を上げた。

一度だけ水彩画で描かれたこの王子を見たことがあつたが、その絵画よりずっと美しい深い碧の瞳を持つ青年だった。

「ユアン殿下、お久しぶりで御座います」

ルイションが片膝を付けて頭を下げるのを見て、私達三人も頭を垂れた。

「頭を上げてくれ。ここは城でもなければイリシエン王国の領土ですらない、不浄の森ゆえ、礼を尽くす必要は無い。」

久しぶり、ルイ兄」

言われた通り、遠慮なく頭を上げる。

よく見ると、なんとなくユアンとルイションが似ているのが分かる。ユアンの髪は先帝であつた父親譲りの銀髪だが、深い碧眼は二人共同じ色をしている。

ユアンとルイションは従兄弟である。

先帝とルイションの叔母との間に生まれたのユアンだった。

二人は公式に会うことが許されていなかつた。

公爵家の長男であり、王族とも縁があるルイ・フィリップが会うことがで  
きない理由がある。

呪われたルイ・フィリップを見るだけで、王子に穢れが移るというのだ。  
実にくだらない話だ。

それでもユアンは視察と称して北部領にちょくちょく出向いては護  
衛の騎士を撤いてルイ・フィリップと話していたらしい。

そして、第一王子ユアンは母の死後、行方不明となりケーフンに太  
子の地位を奪われ王への道は閉ざされたのだった。

「ユアン、この不浄の地においてもその王家の血は眩いばかりに光  
を放つてはいるが北部民は知っている。この国を変える革命のために  
力を貸してくれ」

王家への忠誠心など欠片も持たない男、ルイ・フィリップが、ただの弟に  
諭すように話を切り出した。

## 第1-1話（後書き）

ここ数日の記憶がないですよー

## 第1-2話

イリシエン王国～終末の宣告～

\* \* \* \* \*

一人きりで話したいと言った、ルイシェンとコアン以外は小屋の外にいた。

サクラ、ライズ、リリー、セルフィーの四人はそれぞれ樹に背を預けて座り込んだ。

自分の家なのに追い出され、ムスッとしているサクラにセルが問いかける。

「あの、サクラさん。どうしてユアン殿下がサクラさんの家にいるですか？」

「ごもつともな疑問であつた。

サクラにユアンの居場所を知らないか聞きに来たら、予想外にもサクラの元に居たのだから。

「うーん、なんか面白い人だつたから連れてきたんだよ」

答えになつていないような気がするが、どこか抜けているセルフィーは成る程、と一人納得している。  
そこへリリーが更に問う。

「王子殿下の護衛、此処まで連れてきた騎士がいたと思うんだけど、

そこからは?「

「さつきの首、見たら分かると思うんだよ。基本的にわたしの領域に入った生き物は首を狩ることにしてるから」

キニ達は例外なんだよ、と付け加えてサクラは告げる。

「あ、そうだ。『ご飯を探しに、せつかく外に出たのに獲物を獲つてなかつたんだ。』

領域に入った反応がしたから、熊か兔が迷いこんだのかな?と思つて狩ろうかと思つたら、人間だもん」

流石に人間は食べないですよね?

とセルフイが呟いたのを聞き、槍を磨いていたライズが訝しげな表情をした。

\* \* \* \* \*

「ルイ兄の考えはこうだろ?」  
第一王子である私を森から救い出し、王に成るべき者だと主張し、軍を上げる。  
そして反抗する宰相一族を殺し、私を王に押し上げて、英雄となつたルイ兄は権力を握る。

私が王になどなりたくない事は知つてゐるだろ?」

ルイションは小屋でコアンを説得していた。

幼きころより、城は敵ばかりだったコアン。

父は政務などは宰相に任せ、女を侍らせ宴を開き、我が子に見向きもしない。

城内にいる富もほとんど宰相の息がかかつた者ばかりで自分を見ても上辺だけの礼をするだけであった。

唯一の味方であつた第一王妃の母は第二王妃（ケーフンの母）に毒殺された。

「最終的には、そうだ。現王国の中核を殺し尽くす。だがその前に北部で独立し、東部と西部をこちらに付かせる。北部だけでは勝てないからな。東部の領主も西部の領主も、宰相一族の独断専行には不満を持つている」

宰相の出身地である南部や、王のいる中央部は北、東、西から税を絞り尽くして豊かな生活をしているのである。北、東、西の力を合わせればイリシエン王国を崩すことは容易い筈だ。

「そういう問題ではないと言つていいのだ。たとえ勝算があつたとしても私が王など…。

それに、何百年という歴史を持つ国を捨てて独立するなど、民が悲しむだろうし何より、属国であるイリシエンが滅べば帝国も黙つてしまはない。

この不淨たる森で一生を送る方が、何倍もましといつものだ

「コアン、王とは？

お前の言つたとはなんだ。あの鶏糞のことか？それとも先代の生塵ことか？

あんな者は王者とは呼ばぬ。愚者だ。

コアン、お前は真の王になるのだ。臣下から信頼され、民から愛される、真の王に。

腐ったイリシエンなど滅びた方がいい。民も新たな王を望んでいる。帝国には、これまで通りの金と食糧を収めていれば問題ない。

コアン、何百年の歴史も、このままでは終わる」とは曰に見えてくる。

高すぎる税を絞られた農民は冬を乗り切れずに死んでいき、若い人間は俺達のように賊となる。そうなればいずれ立ち回れなくなるのは必然だ」

コアンはふと思つ。

この男の目的はなんなのだ？

王を代え、国を変え、自分は何者になるつもりなのか。

呪われた子と言われ、この国を恨んでいる筈だが、そういう事は何も話さずに正論だけを述べている。

この国の未来を救いたいとも言つのか？

ああ、そうか。

人だ。人を案じていてるのだ。

人、人、人。人が集まれば街となり国となる。

今まさにルイ兄は王なのだ。黒獅子旅団という國の王。

本来の流れであれば、いすれは北部領の王となり、そして……。

ルイ兄が言つたような真の王、それは自分自身のことではないか？つまり今のイリシエン王国の民はいすれ自分の民になるという考えなのではないか？

そこまで考へ、言つてやる。

「獅子の首くび、一いつ並ながぬがへ。」

田の前の悪党が、ニヤリと嗤わらつた。

## 第1・2話（後書き）

リリーとセルが空氣だつた不淨の森編

自分の文才の無さを痛感しました。

登場人物の多い小説を読むと、すごいなーと思つ

\* \* \* \* \*

ゴアン＝イリシエン

15歳

イリシエン王国の第一王子。

いわゆる太子だった。母はルイシエンの叔母。

王の死後、母と共に毒殺されそうになつたが、毒の耐性が強く未遂に終わり、近衛騎士と共に不淨の森へ逃げる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7208y/>

---

漆黒の騎士と白衣の天使

2011年11月30日20時52分発行